みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

歴史の中のストリートとトランスローカリティ：トランスナショナル・フローとローカリティの組み換え的創造：構築される移民空間のローカリティとストリート性：おやじといくストリート：パリのチュニジア人たちのカフェ通いから

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 植村, 清加 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001215

関根康正編『ストリートの人類学』下巻
国立民族学博物館調査報告　81：367−403（2009）

おやじといくストリート
パリのチュニジア人たちのカフェ通いから

植村　清加
成城大学民俗学研究所

本稿では，パリのチュニジア人たちのカフェ通いを具体の場として，ストリートと生活の場の接合のかたちを考察する。パリは仕事を求めてやってきたチュニジア人たちが集まる移動と生活の道にあり，目的地かつ立ち寄り，滞留，立ち去りの場である。彼らが繰り返す頻繁なカフェへの出入りは，目的の曖昧な行為を多分に含みながらも，立ち寄りの反復性，多形態の店々の横断，そこに展開する社交の術とつきあい技法が存在し，人と人，店と人，店と店を結びつける雑多な接触点が蓄積されている。また，パリという都市で生活の場を築きあるいは維持する彼らが消費者や憩いの場として通過するだけでなく，店の売買が生じたり，起業に賭けるといった働きかけの場ともなっていた。本稿ではこうした空間と関係の多面性のなかで，複数の場と関係が同質化あるいはネットワーキング化されることのないまま反響し，非系統的な連関性を創出していることを明らかにした。

1　モザイクとしてのストリート
　1.1.　文脈のモザイク
　1.2.　透明人間ではない歩行者・観察者
　1.3.　ストリートとコミュニティ
2　おやじといくストリート
　2.1.　パリのカフェ
　2.2.　カフェに通う人びと
　2.3.　冗談技法
　2.4.「友達 copin」の店
　2.5.　居抜き
　2.6.　交差する内と外
3　結びにかえて

キーワード：通う，はしごする，親しみ，オプション，非系統的連関

1　モザイクとしてのストリート

本稿は，フランスのパリ地域で暮らす中高年チュニジア人男性たちのカフェ通いと，彼らが通うカフェに意味世界として展開する場と空間の複数性を通して，ストリートと生活の場の接点のかたちを考察するものである。

「パリ―カフェ―チュニジア人たち」というテーマは，パリとカフェという点でもマグレブ系移民とカフェという点でも，そう新しいものではない。アラブ社会とカフェの関係は，長く男性たちの社交・情報交換・余暇の場など日常的で人びとの生活に根ざした多義的な機能を含みもつパブリック・スペースとされてきた。それを反映するように，フランスに住むマグレブ系の人々のカフェ通いは「カフェ社会」という「彼らの出身地での習慣」のフランスでの再創出として，非常に「ローカル」な営みだと捉えられてきた[1)]。

他方，19 世紀に飲食店として誕生して以来，パリのカフェは，人々を結びつけ，多様な活動が集まる媒介的空間とされてきた[2]。それは人々の身近な日常生活の場であるとともに，近代ヨーロッパと世界史の結合点であり，飲食，商い，都市空間の歴史や[3]，社会関係と社会階級の歴史の舞台として，歴史的蓄積と地元性をもつものとして社会的にも象徴的な位置をしめてきた。どちらも，アラブとフランスという異なるイメージにおいてではあるものの，「ローカル」な人々の生活の場を想起させる響きを与えられている。

そうした形で想起される「ローカル」な生活の場とは，今日，非―場所（オジェ）や無（リッツア）に対置された「場所」や「存在」の空間に喩えられ，概念化されてもいる。しかし，本稿では，個々の都市生活者の生活において，個別の場所が，ほかの場所や活動といかなる連動性や媒介性をもっているのかに注目し，ストリートにおける「複数の日常」に目を向けたい。ストリートでは，モノや空間，行為，人が，機能やモノの形態，文化，出身地などの多様な要素のインデックス群として流通し，それらが媒介的な役割を果たすことで交換という交通が成り立つ。本稿ではパリのチュニジア人たちのカフェ通いを通して，複数の場所を渡り歩くことが生み出す媒介性から「複数の日常」の意味をみていく。

1.1. 文脈のモザイク

ここでは本稿の舞台となるストリート環境を素描する。パリ地域[4]において，都市のパブリック・スペースとしてのストリートの多様性と雑多性を**つくりだすもの**として広範に用いられてきた手法の 1 つがゾーニング[5]だろう。都市空間のなかに秩序づけられたゾーニングは，都市に住まうという生活様式を機能ごとに細分化している。つまり，「都市に住まう」とは本来総合的な生活の営みであってよいはずなのだが，住むこと，働くこと，消費すること，商うことなどが機能別に分けられ，それらの多様な機能を備えた界隈あるいは都市が発想されている。

都市の意味論において，都市空間を多様な機能のかけあわせと捉える発想は長らく退けられてきたが，もちろん実際の日常生活を秩序づける空間という点では，機能が規定する物理的空間は決して小さなものではない。少なくとも，一般にパブリック・スペースと呼ばれる，誰もが出入り可能な空間（駅，道路，公園，商店，宗教施設など）に対し，住居へのアクセスは異なる。建物入口で暗証番号を入力し，さらに玄関の鍵を開けてもらうか，その開け方を知っている者にのみ開かれる。暗証番号や鍵といった装置とともにこれらは外の空間に対して幾重にか「閉じた空間」とされている[6]。そのため人々が歩く土地は，機能ごとに細分化され，その空間が一義的に開閉された空間として在る。その細分化のなかで匿名的なストレンジャーが交差しあうパブリック・スペースと内部のプライベート・スペースは視覚的・物理的に分けられ，さらに駅，駅前，公園，住宅

地区の路上，商業センター前の路上，商店内など多様な形態で存在するパブリック・スペースごとに，人びとの交通や遭遇の仕方，接触の方法が違うとされている。

加えてゾーニングは街の景観とも関わっている。都市の意味論を展開し，都市に関する機能主義を批判したロラン・バルトは，「中心としてのパリはそこには他者がおり，われわれ自体が他者であるところの特権的な場所として，そこでは人々が遊戯（ジュ）をする場所（エ）として，その周辺部によって常に意味的に生きられて……反対に中心でないもののすべてはまさしく，まだ遊戯的（リュディック）空間ではないもののすべて，他者性をもつものではないもののすべて，すなわち家族，住居，自己同一性なのである」（バルト 2004: 50）と分析したが，パリと周辺地域（郊外）を「遊戯をする場所」と「まだ遊戯的空間でないもの」，「他者と交わる都市」と「家族・住居・自己同一性」とする対比は，社会表象とゾーニングを通じた空間・交通網・景観としても創出されている。

広告規制と都市景観に触れている和田は，パリ市内の広告規制は 7 区域に区分されるゾーニングによって行われているため，市内の石造りの建物の屋上や歴史的建造物，指定景勝地，保全地区では，近郊にある近代的な高層ビルの屋上に設置された広告などをみることがないとしている（和田 2007）。実際，郊外から車でパリ市内に入ると，道路の両側に広がる住居群により比較的画一的だった景色は，重なり響くクラクションとともに石造りの建物が立ち並ぶ街並みに変化する。道路の張り巡らされ方の違いとともに，広場に並木，重厚な石作りの建造物が並び，音や商店，行き交う人々により「都市の活気」が可視化されることになる。またオジェが「都市で働くことはできるが都市で生活することのできない者どもを都市から遠ざける役目を負ったスーパーモダンな地下鉄」（オジェ 2002: 263）と呼ぶ，パリと近郊を結ぶ首都圏高速鉄道網・RER 駅のホームは，市内に張り巡らされた地下鉄・メトロと異なる空間としてつくられている。メトロではそれぞれの駅構内自体が壁の彫刻や絵，ディスプレイに駅周辺の「土地柄」を醸し出す歴史的シンボルの装飾が施されるのに対し，RER 駅ではメトロと同一駅構内にあっても無機質な壁に覆われ，チェーン型のショッピングモール空間に取り囲まれる傾向にある。こうした制度的な空間規制と表現のなかで，郊外を現代的で画一的な空間として創出すると同時に，パリは歴史的で多様な顔をもつ都市空間として創出されている。

パリでは現在も，都市づくりが盛んに行われており，そこでは「界隈のアイデンティティ」にあわせた柔軟な都市プランが施工中である[7]。現在ある界隈の特徴を活かした都市再生は，地域環境の多様性をアイデンティファイして「多様な界隈」からなるパリの魅力を再創出していく。それは一方では，町並みの画一化に対抗し，他方では界隈にふさわしくない要素――観光産業やネオン，看板や視覚的に「地元と相容れない」とされる景観，活気のない空間など――を規制・変更するものである。そこではいわゆるエスニック・ビジネスや輸入雑貨屋も，「パリ風」（厳密には各界隈の特徴化・差異化として表現される）の化粧を施され，街並みに対し突出した要素を出さないものへと塗り替

えられる。

こうして再生した「現在と融合した古きよきパリ」あるいは「最先端都市パリ」という新しい，ピクチャレスクな景観は，経済効果をもたらすだけでなく，「都市」を歩く者の視覚の快楽も生み出している。こうしたスタイリッシュな都市再生とは，画一的な非場所ではなく（むしろそれへの反動を吸引しながら），場所と場所性の再構築として行われている。そうした場所性の再構築のために，細部の仕様をより厳密に規定・規制・変更していく点は重要だろう。そこでの柔軟さとは，人々の往来の性質を限定化した交通整備――機能のモザイク――として現れている。

しかしもちろんのこと，都市計画が行う用途指定は要素の機能を限定することしかできない。私をカフェというフィールドに導いたきっかけとなったチュニジア人・ハビーブは，パリを車で運転中，窓外に点在するさまざまな店をみながら「パリはここもアジア，そっちはアラブ，トルコ……。フランスの時代は終わったんだ」と陽気に笑いながら解説してくれた。そこにはパリ地域に広く点在するテイクアウトも可能な中華レストランや，トルコ，チュニジア，ギリシャ，ハラールというように店の冠と肉の属性やソースを変えながら点在するケバブサンド屋――「ローカル」な媒体を使って雑多に，しかしある種の共通システムをもって広がる無数のファーストフード店――，オリエントやエキゾチックという文字を看板に躍らせた食材店や雑貨店など，様々な看板や商店，その周りを行き交う人々の姿があった。こうした光景は，しばしば単純化して世界各地からの移民がそれぞれに「身内世界」を出現させたものという意味で，世界都市パリの中心性ゆえに「世界中から集まった人とモノ」――出身地のモザイク――として可視化されることになる。しかし，そこに浮上している「パリ」は，無機質な空間もフランスの徴も，世界中の多様性の徴とともに，有徴的な記号として雑多に含まれた場所である[8]。これらが「都市のにぎわい」のもとに可視化されるのは，一方では，雑多な記号が寄せ集まっている点であり，他方ではそこに人々が集まり・群れるという交通が観察されるためである[9]。

多様性の証として受け取られる看板や商品，文字，色合い，人々の身体的特徴を記号としながらも，そこが実に雑多な理由と背景で交通する消費者を相手にする商空間や歩行者であることを思えば，こうした交通のなかで生み出される「身内」や「ストレンジャー」とは，属性として可視化される外見的な記号やすべての人に開かれた一般的な特徴では読み解けない，営みに属するものだろう。つまり，そこには機能や記号のモザイクではなく，生活の営みという文脈のモザイクを考察する必要がある。機能ごとにゾーニングされた空間が，実際には独自の交通を伴いながらも単独で存在するわけではないことを考慮したとき，「複数の日常」とはどのようなものとして捉えることができるのだろうか。

1.2. 透明人間ではない歩行者・観察者

ゴッフマンは「焦点の定まらない相互作用」について述べるなかで，身体は１つの記号体系であり，各人の外観やジェスチャーの表現体系だと述べた。そこでは直接的接触の関係にある人々だけが互いに相手の外観やジェスチャーから，その表現の意味を理解しあえるが，とはいえ身体の持つ記号体系の特徴はコミュニケーション自体としてみたときには焦点を定めることやある範囲にある人々に限定することが困難であり，場合によっては状況全体のすべての人々に拡散してしまうことがあると指摘した（ゴッフマン1980: 38）。

都市にある身体の匿名性とはこの意味で常に記号的であり，ストリートを歩く実践は，「見る者の目」からのみ成り立つわけではなく，見る者の身体も都市のなかでメディアとして存在していることになる。そこでは歩くこと自体がでこぼことした経験――有徴になったり無徴になったりする――である。例えば，フィールドワーク中，郊外団地を歩くにしても，広大な敷地で団地住人が多民族的である地区では私が歩いていても目立っている気があまりしないが，マグレブ系住人の多い小さな地区では路上に出た瞬間「ここに友達でもいるのか？」と声をかけられる。そこで生じているのは，明らかに歩いている場所ごとに私というストレンジャーの存在――外見から推察される性別，民族，職業等により細分化された多様な意味での読み解きが可能である――の文脈が変化しているという運動である。また，電車内や通りでときどき突然中国語で話しかけられることがあった。聞くと「語学の勉強中で実践的に修得したいからアジア人をみかけるととりあえず試している」という。私の知人のなかにも路上で，マンションの出入口で，あるいは特定の場の掲示板を通じて，アジア人や日本人であることを通じて声をかけた／かけられた結果，知り合い，語学交換やルームシェアなどをし始めた人々がいた。こうした身体のメディア性は，特定の場に生じた文脈と，読み手の連想ゲームを抱えた読みときと，それに対する直接・間接の個別的な働きかけを引き起こすものである。歩くあるいは，外に居るという営みはそうした特定の場に開かれてしまう可能性を常に抱えている。

路上，市場，公共交通などと同じく，後述するカフェのなかでも，中高年のアラブ人男性の横に，若い，アジア人女性がいるのは「奇妙な組み合わせ」であり，何人かの人たちは同伴者がいなくなったときなどに「興味から聞くけどどうして一緒にいるの？」といってこの組み合わせの関係やきっかけを聞いてきたり，場合によっては娼婦だろうとあたりをつけて無視あるいは横取りを試みてきた。彼らと一緒にいるという事情――それは１人では用がない場所にも足を運ぶという固有の関係による事情と，私と彼らの身体のそれぞれに路上で徴づけられた外見上の記号の非同一性という質の異なる事情を含む――が促す組み合わせの有徴性が，こうした働きかけを促したといえるだろう。これらのことは，カフェ内部も路上と連続した空間であること，ストリートが「都市機能

上」細分化されたパーツからなっているとしても，人々が外見的な記号を読み解き，興味や趣味を含んださまざまな理由から働きかけをするとき，用途や機能によって統一された空間を越えてしまうことをよく示している。

ストリート上の身体はめまぐるしく変化する環境に自分自身が引き込まれるという点でも，自分の身体が周囲の誰かに働きかけを起こすものである点でも，そのつど「外」からやってくるものに対処せざるを得ない。それは歩く，または居るという実践が，個別の文脈を行為のコンテクストとして受動的に引き受けながら形づくられていることを教えてくれる。こうしたコンテクストの媒介性に注目すると，それは他者を排除し避ける作用とともに，人々を関係づけ，直接的な関係を引き起こし，直接性による新たな文脈を呼び起こす作用をもっている。本稿では，都市を歩く個々人がそれぞれ別の日常の文脈を生きているという複数性ではなく，個々人が歩くことでそれらが媒介され，連なり，分かたれる接触点に注目したい。

1.3. ストリートとコミュニティ

カフェに通う人びとと知り合ったのは，知人が近所に住むチュニジア人男性を紹介してくれたことがきっかけだった。彼はハビーブといい，1969 年，24 歳のときにフランスに働きにきた人だった。彼は，当時の多くのマグレブ系移民と同じく，資格をもたない労働者として渡仏し，最初は工場で働いた。1973 年のオイルショック後フランスに訪れた経済危機は「栄光の 30 年」といわれた戦後の経済発展が頭打ちになった時期だが[10]，1974 年からの経済危機以降，工場の仕事が減ると次々と職を変えなくてはならなくなったという。そこからは，バーテンダーや運輸の仕事，トラックやタクシー運転手など，いくつもの職に就いた。2002 年に出会った当時の彼は，在仏 30 年を越え，60 歳を目前にしていた。足を悪くし運転手ができなくなった彼は前年から恒常的に失業していたが，友人とカフェ・ブラッスリーのオーナーになる計画をたて，店を探しているところだった。このまま失業が続けば，現役から引退してチュニジアに戻るか，戻るにしてもフランスに何らかの事業を残していくかだという。出会いからしばらくしたある日，彼は家族もちの友達を紹介しようと電話をくれ，自分が週の半分はいるといういきつけのカフェを教えてくれた。以降，このカフェは友人紹介という一度限りの場ではなく，私たちの待ち合わせの場となり，徐々に別々にも足を運ぶ場となった。

カフェを利用するに止まらずそこに通うという行動自体は，フランス人にとっても縁遠い行動ではないし，その行動様式を通して意味の世界を探る研究もある。たとえば「食物に対する関係のなかに現れる実質的物質主義が，大衆的エートスの，さらには大衆的倫理の最も基本的な構成要素」であると述べたブルデューは，カフェ通いのなかにディスタンクシオンをみていた。ブルデューは大衆の特徴として「楽しいときを享受し，時間をそれが訪れるがままに受け止めようとする配慮」という現在時へのあり方――そ

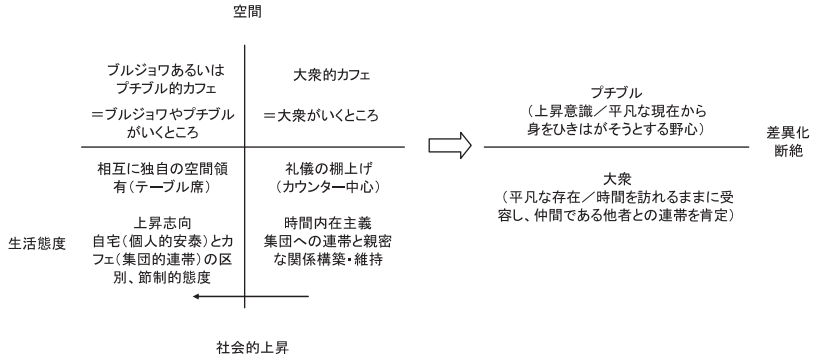

図1　ブルデューによるカフェをめぐるディスタンクシオン（ブルデュー 1990 をもとに著者が作成）

れ自体が他者との連帯の肯定であり，他者とは大衆にとって未来の脅威に対する現在の唯一の保証だという――を挙げる。それは，上昇志向をもつプチブル層が，平凡な現在から身をひきはがしたいという野心のために他人と過ごすことを控え，仲間とともに居るカフェへのアクセスを節制するという生活態度をもつのに対し，ひとつの断絶になるという[11]。

ここではまず，カフェはその種類――大衆的／ブルジョワ的あるいはプチブル的――によって区別され，同時に人々の生活様式――家とカフェの区別，集団（仲間）と個人の区別，現在時の受容と抑制的態度――によって差異化されているという。（図 1 参照）

その上で，ブルデューは大衆的カフェを次のように描写する。

カフェはただ何かを飲みに行く場所ではなく，皆と一緒に飲むところであり，見知らぬ者同士の間でするような検閲，習慣，礼儀などをひとまず棚上げにして，親密な関係をとり結べる場所である。ブルジョワ的あるいはプチブル的カフェやレストランでは，各テーブルがたがいに切り離された独自の領分を構成するのに対し，大衆的カフェは仲間の集まる場所であり，誰もがそこに仲間として加わる。中央にはカウンターがあり，人びとはまずもてなし役であるカフェの主人や，時にはそこにいる客全員と握手してから，カウンターに肘をつく。何でも冗談にとるという，冗談の典型的に大衆的なやりかたが一番うまく達成されるだけでなく，儀礼化した冷やかしや悪態によって，相手を怒らせることなくからかう技術がそこでは磨かれる（ブルデュー 1990: 279–280 を参照されたい）。ここで記述される大衆的カフェという場は，本稿で扱うカフェの場や作法と近似している。しかし，ブルデューがここで意味あるものとして見出すのは，生活態度の断絶――それは時間に対して，周囲との距離に対して，集団に対する連帯の態度に対して――に現れる，大衆とブルジョワあるいはプチブルという階級間の差異・断絶である。

現在の移民たちのなかにも，こうした社会的な移動やフランス化とないまぜになったような「断絶」の語りが，カフェに通うという行為の周辺に張り巡らされている。例え

ば，第2世代の人々や一部の女性たちは，カフェにいつも出入りするような行動は，「向こう（出身地）の男性たちの生活習慣」を継続・継承しているものと意味づけていた。フランス育ちのアメッド（男性・30歳代）は「仕事の後はうちに帰って，家族と過ごす。マグレブの人たちは結婚していても男同士で過ごす時間が長いけど，僕は男同士カフェにいたりしない」といい，ザキア（女性・40歳代）は「父はいつも友達（pote）と過ごしてる。家族のコンフリクトや責任に関わるより家庭内で一人孤立しているのを好むの。私と同じか下の世代でも，その父親たちをモデルにするから同じように男同士カフェにいったりしている。コミュニティから出て行った男性たちは別。彼らは自分の時間をもつ。暮らし方が違うのよ」という。

アラブ男性のカフェ通いはしばしば，彼ら移民の送り出し社会と連続的な関係にある文化であり，マグレブでの習慣の反復として捉えられる。それは同時に「移民コミュニティの文化」ともされており，コミュニティの内側にとどまる人々に伝承されたハビトゥスとして語られる。それは「男は外で女は内」という空間実践と，男女別の社交実践の延長線上にある，男が「外で男同士の社交を生きる」実践とされる。まず，この「コミュニティのハビトゥス」といわれるイメージとストリートの空間的，規範的関係をみておきたい。

ストリートやカフェに通うことは，コミュニティの内側に留まる「文化的行動」の徴とされる一方で，ストリートにおいて逸脱性を付与されたストレンジャーになる場合がある。例えば，パリ地域でこうしたストレンジャーの役回りになりやすいのは郊外に居住するマグレブ系やアフリカ系の，男性ティーンエイジャーである。彼らは身体的特徴とファッションによってその出自が可視化されるとき，周囲のストレンジャーや「公共の秩序」に対し危険のサインを出していると受け取られる場合がある。郊外団地の路上では麻薬犬を連れた警察のパトロールをみかけるし，郊外とパリをつなぐ電車の駅構内ではしばしばアイデンティティカードの表示を求められたり，壁に手をつかされ身体検査を受ける若者たちの姿がある[12]。彼らの身体がこうした形で有徴化されている以上，ストリートは自由な活動が許されるパブリック・スペースではありえない。

それは路上のコントロールとして行われるだけではない。郊外で若者たちの「余暇」を活動対象にした自治体のサテライト（「若者たちの家」）では，「若い子たちが興味をもっていることを活動に取り入れる」ということで，ヒップホップ教室やタグ教室なども開催される。たとえばタグ教室ではタグ・アーティスト指導のもと，作品をつくることができる（写真1参照）。

こうした活動をオーガナイズする担当者は「こうして中で自由にやらせれば外でばかなことをしない」ともいう。この場合，中とはらくがきが余暇活動として制度的に認められる自治体メゾンのプログラムと空間の内側を意味し，外とはそうした制度的秩序の外であり，路上を意味することは明らかだ。室内に持ち込まれた「ストリート・カル

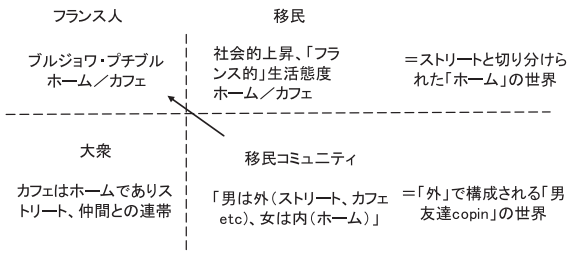

図２　フランス育ちの人々による習慣と文化的「断絶」の語り

チャー」はアートであり教育や余暇の一環になるが，ストリートのカルチャーとは異なるものとして別の性質において意味づけられている。

また外＝ストリートは，親密な仲間集団の世界と重ねられ，路上の若者たちは都市の危険な徴として社会秩序の内側へと再編成されるよう働きかけられる対象である。それは，社会問題化された集団としての男性ティーンエイジャーたちの問題の状況を解決する策が，個々人がストリート（集団）から「足を洗って」，まともな仕事につき社会へと編成されることとして現れる。マグレブ系の人々にとってこのことは「息子たち」の問題との距離化や対処として受けとめられている。「路上にいる息子たち」の問題は，「男が外で女は内」というマグレブ地域の文化が，息子の居場所を家につくらず，学校から戻った息子たちを外に追い出し，外で遊ぶようにしむけるために彼らが犯罪や非行に近づきやすくなるのだという説明を人々からよく聞く[13]。そのため「文化的な習慣行為」を改変することが問題を避ける道だと考えられている。

他方，彼らの行動モデルとされる「父親たち」は，大人の男性たちであり，路上において危険視されたりあからさまなコントロールや教育の対象にされないものの，先に紹介した２人の言葉のように，生活習慣において異文化視されることになる。そこでは，外（＝ストリートやカフェ）での男友達との社交は，カップルをベースとする家族関係としてのホームに納まりきれない身体の証であり，移民コミュニティ内のハビトゥスに基づく実践とされている[14]。「コミュ二ティの外に出た人の生活の仕方」と語られる「フランス化した生活態度」と差異化された移民コミュ二ティの内側のハビトゥスとは，ブルデューが大衆のハビトゥスのなかに見出したように，個人的な社会上昇を果たさぬ大衆的身体へのまなざしとパラレルな関係にある（図２参照）。

確かに彼らがカフェに寄るのは，ブルデューが述べたようにコーヒーやビールをお腹に入れることではなく，みんなと一緒に飲むことだった。しかし，それは“大衆のエートス”として，彼らが楽しいときを享受し，時間をそれが訪れるがままに受けとめようとする現在時のあり方のためとか，大衆的カフェは大衆にとって仲間がいる場所であり，仲間同士の連帯が未来への唯一の保証だから通うという“大衆的ハビトゥス”を彼らが手放さない（せない）がために反復されているわけではない。彼らのカフェ通いは，

確かに習慣的な反復かもしれないが，コミュニティの内なる実践というよりも，この都市で生活の場をつくる実践である。以下ではカフェの空間はどのような場としてストリートに展開し，彼らが〈何を営んで〉いるのかみていく。

2 おやじといくストリート

2.1. パリのカフェ

都市機能上「商空間」に位置するカフェは，ストリートから1つ入った内側の空間をもつとともに，通りの延長であり，交通の道でもある。パリの多くのカフェの特徴に，路上に出されたテラス席と看板，路上から店内をのぞき店内から街路を観察しうるガラス窓がある。これらの外観や看板に記される情報は商空間に対する様々な規制の対象でもあるが，テラスやガラスは開放性の象徴でもあり，カフェ空間をストリートと連続した交通的なものにし，流動する人々同士の接触を提供している。

一般的なパリのカフェは，路上に出されたテラス席，店内のテーブル席，スタンドが基本のカウンターという3つの空間を内包している。またカウンター席はテラスやテーブル席よりも料金が安いなど，カフェに共通するシステムとして内部に2種類のスペースとそれに応じたサービス・料金体系を内包する。玉村はこれを，提供されるサービスとカフェスペースでの過ごし方の違いと説明している。テーブル席は料金が高いが，注文・決算などにギャルソンが足を運ぶ。客は，そこでの時間と空間を自由に占有できる。これに対しカウンターは注文も品だしも支払いもその場で行うため安いが，代わりにカウンターを隔てた店主たちとのコミュニケーションから生まれる親密な雰囲気が利点だという。こうして，客にはカフェでの過ごし方に選択の余地がある（玉村 1983）。

客にある選択の余地とは，料金と店から受けるサービスおよび周囲との関係からくる時間と空間の過ごし方への余地である。サービスの点で「セルフ」の領域を大きくすると価格が安くなり，受けるサービスの領域を大きくすると価格が高くなる。同時にこうした「セルフ」の領域の違いに伴う占有方法の違いは，周囲との関係を含む所作，つまり「コモン」に対するエチケットの違いであり，それがこの2つのスペースの「雰囲気」の違いを醸し出してもいる，と捉えることができるだろう。そこには，サービスとセルフのあり方を伴うパブリックな作法の異なる空間が同時に埋め込まれているのである。

近年パリに進出中のスターバックスやチェーンの型ファーストフード式のカフェでは，店員や周囲の人びとと「親密な雰囲気」のなかで飲むカウンター空間はない[15]。ギャルソンもいない。ある友人は街中のスターバックスを指差して「新しいカフェ」と呼んでいた。これらをカフェのタイプとして比較した場合，新しいタイプのカフェの登場により，一般的なカフェ構造をもつ店は，「伝統的」なパリのカフェの雰囲気や画一的ではない「ローカル」なタイプの店として顔をみせることになる。この「ローカル」なパ

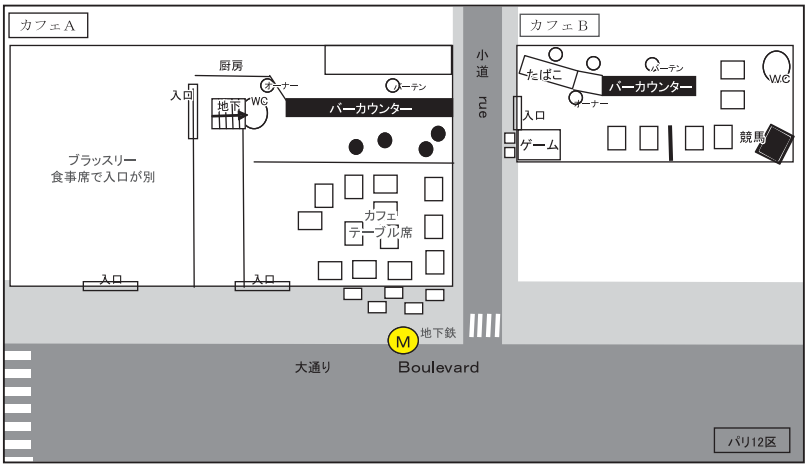

図3　カフェA・B

リのカフェはその都市伝説的な響きや，流動的で一時的な顧客と常連という店への「馴染み方」によって，生活者にとって意味のある「場所」であると語られる傾向にあるが，そうした見方とは裏腹に，まずは選択性を内包した，優れて合理的なシステムから成り立っているのである。

このように，一口に人々が自由に行き来できるパブリック・スペースやカフェといっても，店の立地から，内部の空間構造や扱う商品，客と一体化して醸し出される店の内部あるいは全体の雰囲気が，曖昧ながらもある種の交通を開閉する要素となって，個々の店の交通を特徴づけている。個々の店の雰囲気や賑わいは，システムや機能，通行とコミュニケーションという異なるタイプの交換がともに連関することで生み出されている。

以下で取り上げるカフェ通いのうち，主な行きつけとなっていた3店舗の概要を記す。

①カフェA

12区。大通りと広場，メトロの入口に面した好立地にあるカフェ・ブラッスリーで，年齢や性別に偏りない雑多な客で賑わう。オーナーは若いアルジェリア人。伝統的なパリのカフェの雰囲気をもつ店内は大きくブラッスリーとカフェに分かれており，入口も異なる。カフェ部分は路上にテラス席，店内手前がテーブル席で，一段奥まってカウンターがある。カウンターからブラッスリー側に移動する通路に地下トイレにつながる階段と厨房出入り口がある（図3，写真2，3参照）。

②カフェB

パリ12区。カフェAと小道を挟んで斜向かいに立地。オーナーはアジア（中国）系。

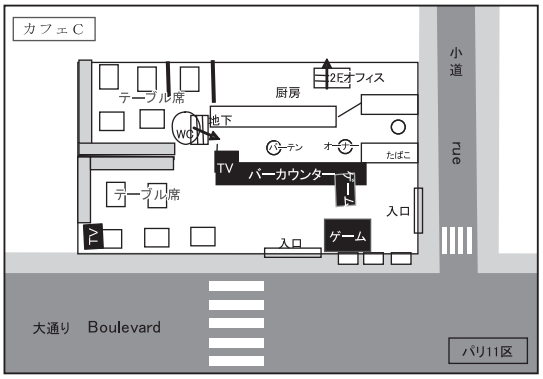

図4　カフェC

たばこ屋を兼ねたカフェ。店で働く中国人女性たちとたばこを買いに立ち寄る人を除けば，客はほぼ中年男性だが客にアジア系が多いということはない。舗道に出されたテラス席があり，入店すると左手にたばこの売店，続いてバーカウンターが，右サイドと正面奥はテーブル席である。店内入って右奥に競馬の画面がある。特に競馬の時間帯にはたばこを吸いながら競馬に興じる男性たちで黒山の人だかりとなり，煙だらけになる[16]（図3，写真4参照）。

③カフェC

パリ11区。大通りと小道のぶつかる角に立地。2つの通りどちらからも入れる。オーナーはチュニジア人。たばこ屋を兼ねたカフェ。年齢や性別に偏りない雑多な客。大通り側の歩道にテーブル席が3つほど出され，そちらの入口を入ると正面がカウンター，左がテーブル席，右がたばこ屋になる。店が付帯する設備としては，たばこ売店とカウンター中ほどの上部にある数あてゲーム画面であり，カウンターの人々はしばしば賭けて遊んだ。地下にあるトイレに行くには，カウンターで専用コインをもらう必要がある。カウンターの奥に厨房，さらに奥に階段があり2階がある。2階はオフィスだが，テーブルとソファベッドのある広々としたサロンとオフィス部屋，寝室が2部屋，キッチンとバスルームがある（図4，写真5，6，7参照）。

以下に登場する人々の場合，昼間の時間帯や仕事の前，元来アルコールを口にしない人たち[17]は，一般にエスプレッソを飲んだが，それ以外の場合は基本的にビールを飲んだ。値段は店によって異なるが，エスプレッソ1杯がおよそ1〜1.5ユーロ（約130円〜190円），25clハーフサイズのビール1杯がおよそ1.9〜2.9ユーロ（約240円〜370円）である。

2.2. カフェに通う人びと

私がハビーブに連れられて最初に向かったのはカフェ A だった。彼らはたいていカフェのバーカウンターエリアにいた。カウンターのほか，スタンド用の背の高い小さな丸テーブルがあり，その一角が彼らのおきまりの場所である。そこは男性が圧倒的に多い空間だ。ここで彼らが輪をつくり一緒に飲む顔ぶれは常に流動的だが，当初の目的である紹介相手のカルロ[18] のほか，主に 40 歳〜50 歳代の男性たちだった。多くはチュニジア出身者だったがチュニジアでの出身地域は異なる。他にアルジェリア，エジプト，カンボジア出身中国人などがいた。職業は飲食業を中心に，内装業，タクシードライバー，オフィス勤務などである。多くの場合仕事の行き帰り，通りを挟んで向かいのカフェで競馬やカードゲームを終えて輪に加わるなど，個々に立ち寄っていった。

店に入ったときにあいさつの言葉を口にするのはカフェに限らずフランスでは一般的なエチケットだが，彼らは入店するとまずオーナーやバーテン，カウンターの顔見知り 1 人 1 人にあいさつ――たいてい握手，ときにビズ（頬を寄せ合う）――をし，それから自分の立ち位置や知り合いの輪にとどまった。私のようなストレンジャーにも，なじみ客の連れとあって握手の手が伸ばされるか，マグレブ系男性のうち何人かは自分の胸に手をおくあいさつをする。その際，周囲がストレンジャーの紹介をするなどして，名乗りあう。こうしたあいさつは同じ輪で飲む人だけでなく，あいさつの後は別の場所で飲むなじみ客たちとも行われる。

カウンターではバーテンや店主，あるいは他の客と会話しながら飲むことがほとんどである。1 人でも友人と一緒でも，ビールやコーヒーの注文をしにバーに寄っては店員と話し込んだり，冗談を飛ばしあってはその掛け合いに他の客が乗じて会話がはずむ。そもそもカウンターでの会話は複数の場所で同時並行的に起こるとはいえ，その場にいる人々は輪の外にいても，ストレンジャーであっても周囲の話を聞いていないわけでも，聞こえないわけでもない。それはカフェの他の場所や公共交通機関のなかでも同じである。カウンターでも他の客の会話に対しゴッフマンが儀礼的無関心と呼んだ態度がみられるが，反対に周囲の話に加わったり，割り込む場合も多い。その場合，「ちょっと聞こえたもので」などの断りを入れながら会話に入るのだが，そうした断りがなくてもストレンジャーを常に会話に迎えいれる態度がみられる。また，椅子があるとはいえ立ち飲みの方が多いため，混んでくれば必然的に人々は相互に重ならないよう自分の場所を確保しつつ場所をあけあい，席を譲ることもある。そのためカウンターは，店員やその場にいる客とそこでのやりとりにおいて，カップルや女性同士の客が話や休憩をしたり，1 人でくつろぐ人がいるテーブル席よりも，より関係的な作法とともにある空間だった。握手のあいさつをするのも，彼らがなじみ客同士，顔見知りかその知人だからだが，あいさつしあわなかったストレンジャー同士でも話が弾んだところで改めて握手し，名乗りあう。

支払いにも特に決められた形式はない。店の支払いシステムとしてもその場で1回ずつ支払っても数杯まとめて支払ってもかまわない上，彼ら同士の間の決算も創発的だ。基本的に自分の分は自分で払う。しかし，足りない小銭の融通，スタンドで輪になっている場合はビールの2杯目，3杯目となると，自分のお代わりをとりにいくついでに他の人の分も払う場合，最後に割り勘で支払う場合，別の機会まで持ち越されるおごりに加え，カウンターで横並びとなったストレンジャー同士が意気投合したときに1杯ずつおごりあう場合などである。

話が弾んだところでストレンジャー同士に交わされるあいさつや名乗りあい，断りを入れた割り込みの作法は，入店後のあいさつ同様，カウンターでの重要なパブリック・エチケットである。こうした作法は同時に，ストレンジャー同士を関係づけ，場合によっては顔なじみという関係的な場をつくったり，日常生活の他の場所でときおりみかけていた者同士が，カフェで偶然遭遇したことで同じ輪で飲む友人になるケースが生まれていた。また，そこには会話や冗談の掛け合い，話への入り方，柔軟な支払い方法にみせる様々な技法が存在する。こうしたやりとりの作法と技法により，実際に親しいかどうかにかかわりなく，親しみのある場がつくられたり，親しい関係がつくられる。当初，知り合いをつくるのに苦労していた私には，いるだけで入れ替わり立ち替わり誰かがやってきては言葉を交わせ，しかも毎回誰が現れるか，どんな話に出会うかわからないという偶然性を備えているこの場は，彼らとともにいるカウンター空間の魅力であり，かっちりした約束によって「仲間と集まっている」わけではない彼らにとっても魅力のようだった。

こうした作法に加えて彼らのカフェ通いにおいて重要なのは，通うカフェが複数ある点である。つまり，通いとは特別な用事や特定の仲間がいる1つのカフェに対するものではなく，店をはしごしたり往復しながら居る営みのことだった。例えばカフェAは大通りに面していたが，カウンター側の窓ガラスからみてちょうど小道をはさんだ向かい側に小さなカフェBがあった。カフェBにはたばこや，新聞，ガム，競馬やロトの券などが売られており，商品構成が異なる。玉村はパリのカフェに付帯する2次的な楽しみを満たすたばこや競馬，ゲームの設備を，カフェの「オプション」と表現しているが，店に備わる商品や設備のセットはまさに百花繚乱のカフェが一面ではオプショナル・パッケージの集合体であり，それゆえに生み出される交通（フロー）がある点が浮き上がる[19]。

カフェBでのハビーブたちは，カウンター付近でバーテンや店のオーナー，店番の女性たち[20]，カウンターで横に並ぶ客たちと話しながらビールやコーヒーを飲み，売店で新聞を買って読んだり，ロトや競馬をして過ごす。その後，カフェAに新聞を持ち帰ったり，誰かいないか見に行ったり，知人がAにいないからとBをのぞいたり，Bからでてきた知人がガラス越しにAのカウンター付近に彼らがいるのを確認して合流

するなど，頻繁な往来とともに過ごしていた。道路をはさんで別々に存在するAとBは，店の様子や雰囲気，商品やそこでできる遊びも異なるが，そうであればこそ，彼らは双方の店のカウンター空間と店に付帯するオプションの違いをつなぎあわせながら居る。彼らのカフェ通いやとどまる方法からみれば，カフェAのカウンターとカフェBは連続性をもった空間であり，交通とは流れであると同時に行き来のある滞留である。このことを別の視点でみれば，カフェAとBの空間の連続性とは，AとBのユニット性である。2つの店は価格，店の雰囲気，従業員等が比較されることで競争や客の取り合いの関係にあるだけでなく，異なる機能やニーズをもとに住み分けや空間のドッキングがなされる共存関係にある。こうした競合と共存関係は，後述していく彼らのカフェ通いの営みを通してさまざまな店や場所を雑多につないでいる。

もう1つは，文字通りカフェのはしごである。彼らは3〜4人集まって飲んだところで，別の店に移動することがあった。それは近くの店のときもあれば，時にメトロや誰かの車で移動した。移動時にそれまでいなかった人が合流する場合もある。しかし，カフェA+Bにいると，そこが彼らの行きつけの店であり関係的な場としてみえるが，そもそもカフェは1人1人バラバラにやってきて，バラバラに出て行く場所でもある。それぞれの人と個別に行動してみると，AやB以外にも彼らはそれぞれに自分の行きつけの店を持ち，また常に開拓してもいて，帰宅するまでの間に，数軒の店に立ち寄る。また，バスをまつわずかな時間に近くのカフェを利用する場合もある。

彼らの日常生活におけるカフェの存在を知るために，カルロの立ち寄りを概観しておこう。彼は飲食店の厨房で料理人として働くため土日以外，朝7時から午後3時すぎまで働く。郊外にある店から一度帰宅後，夕方まで家で休む。睡眠，テレビ，家族との話，夕食などである。19時近くになると彼はバスに10分ほど乗ってカフェAに現れる。カフェA近くのレストランで不定期ながら夜の職を得ていた時期は，18時45分頃にAに顔をだし，エスプレッソを一杯飲んでから仕事にいき，再び仕事が終ってからAに戻って過ごす。カフェAとBの数軒先にある別のカフェにもしばしば足を運び，家への帰宅は深夜という具合である。また休日の午後には1週間分の買い物として，ハラール肉を買いに住まいの13区から10区の肉屋まで行っていたが，その際にも肉屋周辺のカフェや自宅近くのカフェに寄り，一度帰宅し，また夕方にはカフェにいく。彼の家に夕飯を食べに行く日でさえ，夕方カフェで待ち合わせるとしばらくそこで過ごし，バスに乗って家の近くについていながら付近のカフェに入る。そのため彼の家につく頃には夜も21時を過ぎてしまうのが常だった。他にも子どもが母親から用事を託って父をカフェまで呼びにくる人などもおり，カフェという場所自体，ごく日常的に，頻繁に出入りする場所なのである。そして，彼らがこうした出入りを繰り返す店のうちのいくつかは，チュニジア人の経営やチュニジア人が集まるかどうかに限らず，冗談を飛ばしあい悪態をつきあうという親しみのあるつきあい方を含め，「友達 copin の店」などと呼ば

れていた。

2.3. 冗談技法

カフェでの彼らの会話には，仕事や職探しの話や社会保障に関する相談，知人がチュニジアがくるから泊めてやってくれという頼み事，金の貸し借りなどが含まれたが，それらの「用事」は，冗談をいったり誰かをからかいながらの雑談や賭けごとなどの楽しみの合間に行われた。むしろカフェで彼らがすることの多くは，冗談を絡めたおしゃべりであり，関係濃度が異なる人々との付き合いが親しみのあるものになるのも，この冗談や誰かをからかう技法にかかっていた。このことは通う場や親しさの表裏を考える上で決して小さなものではないように思われる。カフェのなじみ同士が掛け合う冗談は，お互いの差異や特徴を様々に用いたり，露骨な表現を相手に投げかけながら，笑いと怒り，お約束と本気のスレスレをいく冗談関係ともいえるものである。

例えばカフェ A でハビーブが「ロバ」と呼んでからかうチュニジア人男性シャバーンがいた。ロバは徹底的に「あほ」という意味で使われ，使う場所と相手を間違えたら大変な言葉だ。少し強張った私にシャバーンが「なんでこういわれるかといえば，俺は子どもの頃勉強が嫌いで，髭が生えても小学校を卒業できなかったからなんだ」と自身のエピソードを披露すると，周りが手をたたき，鬚真似をして笑う。カフェ A のパトロン・ウィルとハビーブもこうした「冗談関係」にあり，年齢からいけば半分くらいであろうウィルはハビーブを決まって，これみよがしに年寄り呼ばわりした。ハビーブもそのたびに軽口を叩き返す。40 歳で独身で彼女もいないチャンは，「ペド（ホモ）」とからかわれた。チャンは自分（アジア人）のサラサラの髪ときめ細かい白い肌を持ち出しながら，「この美しさのおかげでマダムと呼び止められた」といって笑い飛ばす。

エピソードや持ちネタ，あだ名，年長者の年寄り扱いをはじめとする数々のステレオタイプによって，その場にいる顔ぶれを特徴化する物言いは，誰かを標的に長々とひきずるものではなく，飲んだり競馬やロトをしたり，別の会話と同時進行で続けられる。こうしたやりとりは 1 対 1 の名づけあいにとどまらず，周囲の人々を取り込みながら場を笑いで盛り上げたり，離れた場所にいる 2 者が大きく広げた身振りを交えながら行うパブリックなやりとりとなっている。

私自身も目が魅力的といわれたが，その目とは私個人のものではなく，つりあげられたり，ピスタチオといわる「アジア人の目」というステレオタイプ的な特徴表現によるものである。差別を問題にする文脈ではアジア人の身体が「女らしさ」として表象されたり，「魅力的なアジア人女性」というステレオタイプも，あからさまな差異意識やレイシズムに根をもつと批判的に議論されるが，カウンターの輪ではそのあからさまなステレオタイプこそが掛け合いに使われる。「フランス人と結婚したって，アジアンティックな子供が生まれる。なぜかって？ たまごを割って黄身と白身をかき混ぜても黄色い。

それと同じさ」とか，鞄に入ったカメラでもみつかれば「人をみたときシチリア人は銃の引き金をひき，日本人はカメラのシャッターを押す」といってからかわれる。私が日本人と知るや顔の前で両手をそろえて律儀にお辞儀するしぐさをはじめ，フランス語の会話の語尾に強調した日本語の「ネ」を入れて日本人女性の会話の様子を装うなど，日本というキーワードから連想的に広がる様々なヴァリエーションがある。それらは一般的なステレオタイプだけでなく，彼らがタクシードライバーや職場の飲食店で関わる日本人やアジア人の顧客の仕草や話し方の特徴をピックアップし，それを真似て即興的につくりだすものである。また，こうしたさまざまな特徴化や冗談に呆れたり笑ったりする私をみて，日本人とはじめて話すという人が「日本人って笑うんだな」とまじめにいうと，人々は口々に自分が見聞した日本人についての情報を集め，日本人談議やアジア人類型談議がはじまる。こうしたやりとりは，私のある部分を記号的に特徴化し，他の具体的な日本人要素と結びつけるものだが，何よりもその場にいる私（私／日本人）との関係化であると同時に，それぞれが生活のなかで行う観察や持てる情報を周囲の人々との話の種にする営みである。

ときどき，行き過ぎた言い回しやからかいが緊張を生むことがあった。チュニジア人の“ビンラディン”（40代／顔がそっくりなのでこの仇名）は，カフェAのカウンターにいつも1人できているが，あるとき，悪乗りからハビーブを怒らせたことがあった。そのとき，軽口をたたくときに「歳を取った」と自らいって笑うハビーブが彼に告げたのは，「俺はお前より年長者だ」ということだった。ビンラディンが「知るか。知り合いに頼んでお前を撃ち殺す」といいだすと，2人の対立は深まり「表にでろ！」という言い合いになった。人々は「ここでは楽しむために冗談をいって笑う。本物の銃を持ち出すなんてイカれてる。飲みすぎだ！」といった[21)]。

カフェにおける「親密な関係」の輪を作り出すのは，冗談関係のための冗談である。ここでさまざまな要素が類型化され誇張されるのは，その場での関係化のためのものだが，それは同時に，一歩間違えれば緊張や対立を生み，親しみのある場を崩してしまうものでもある。多くの場合，そうした緊張は口ではからかいながらも相手の肩に手を回すなどの言葉を逆転させた身振りや，周囲に向かって何度も投げかけるウィンク，周りが他の冗談をつなげて別の方向にもっていくなどの様々な技法を通して，「冗談だ」と伝えられたり，衝突が回避された。つまり，そうしたパフォーマティブな行為のかけあいと身体の触れあいこそが，カウンターでの気のおけない関係や，親密な談笑と空間をつくりだすのであり，空間構造が本質的にもつ開放性や，顔なじみの親しい者同士だからできるものではない。そこでのエチケットとは，単に決められた場で特定の所作をとることではなく，場の雰囲気を親しいものとしてつくり出すパフォーマティブなコミュニケーション技術を磨くことなのである。

こうした親密なコミュニケーションが行われることと，実際に親しい間柄であること

は，同じことではない。知り合ってすぐの頃，カルロが休日の夕食にと自宅に招待してくれたことがあった。誘われたときカフェには 6 人ほど彼の「友達 copin」がいたので，私は当日彼らもくるものだと思っていたが，いってみるとジャケットを着こみ，改まった様子のハビーブと初めて会うチュニジア人男性の 2 人しかこない。「他の人たちは？」と聞くと「他って？ うちはレストランじゃない。なんでカフェで会う連中をみんなうちの夕食に招待しなきゃなんないんだ。さやかやハビーブは友達 ami だから招待する。でもあそこにくる連中に俺が夕食を出してやる必要はない，そうだろ？」と笑った。ハビーブは私が調査に舞い戻り，カフェのメンバーの消息を聞くたびに，「知らないよ。カルロは俺の友達 ami だ。だから連絡をするし，会う。彼は相変わらず元気にしてるし，そのうちここにもくるだろう。でも，他の連中はただの遊び仲間 copin だ」といった。彼らはカフェでも私がそれ以前の調査時期にはカフェでよく一緒にいる人だと思っていた人でも，「覚えていない」とか「最近はみかけない」，「もう一緒にはいない」といった。カフェでの関係は，その場が決定的でもあり，限定的でもあるかたちで維持されるものであり，顔なじみや友達になることはカフェの外で維持される特定集団のメンバーシップを得ることではないのだ[22]。

2.4.「友達 copin」の店

前節でみた冗談関係や親しさは，店主と客との間にもできており，そのことがその店に行きつけるという行為を生み出していた。それは彼らがそれぞれにもつ出入り店マップである。カフェ A や B からの行き帰りにハビーブがときどき立ち寄る店が同じ 12 区内の少し離れたところにあった。道路が両脇にびっしり止められた路上駐車の車でさらに細くなった裏通りにある小さな店である。オーナーはアルジェリア人（カビリー）で，同じくアルジェリア系の若い男女の従業員がいる。ハビーブはカウンターに座って店主と世間話をしながらビールを頼む。店で流れるテレビも会話の材料にしながら，その会話の端々に冗談や相手にあきれてみせたり，ばかにする物言いをする。

テレビでチュニジアにできた新しいリゾートのレポートが放映されると彼は別の日にみた同様の番組の話を持ち出し，私に「チュニジアにはいま，モダンで新しい場所が次々できている」と得意げに話した。すると店主は「何自慢してんだ。お前がそこで遊べるわけじゃなし」と鼻で笑いながら話に入ってきた。ハビーブが「おまえんとこ（アルジェリア）みたいに奥さん 4 人ももらえないけど，俺らは向こうでも快適に過ごせる，いいだろ」[23] といえば，店主は「お前は頭のなかまでチュニジア人だな。そんなこと自慢するなんて。俺は向こうのことはもう忘れた。フランス人だからな」という。今度はハビーブが「うそつけ，そんなところがアルジェリア人。俺は胸をはってチュニジア人だっていえる」といって私にウィンクを送った。ひとしきりこうしたやりとりのなかグラスを空けると，ハビーブは「またくるよ。……いつきても閑散とした店だけど大丈夫

か」と店主に声をかける。店主が「お前にいわれたかない」と苦笑しつつ手をだすと，2人は握手して別れた。店をでたハビーブは，「トラック運転手だった頃に休憩に寄ってた店だが，彼とはもう10年以上のつきあいになる。店主と客というより，彼とは友達copin。いつもああやって言い合うんだ」という。カフェに顔を出すこととは，こうしたやりとりや遊びそのものが目的ですらある。

こうした“親しさ”や“友人関係”も，ただよく来るというだけで成立するものではなく，行為のやりとりを通してつくられ，維持される。そのため店に来たのにあいさつを忘れて他の人とピンボールを楽しんでいるなじみ客に，店主が「お前にはビールはやらない」という「友達の店」（後述するカフェC）もあった。このときコミュニケーションというエチケットは，単なる習慣ではなく，店主と客であっても商売人と消費者として出会っているのではないというメッセージを発する。関係のなかでのモノの交換を喚起させるのが，他でもない「俺の店のビール」というモノなのだ。

他方もう1つの「友達の店」では，入店拒否のような出来事があった。ある日，チュニジアが登場するサッカーの試合があるからみんなで観戦しようということになった。いつもの店A・Bにはテレビがないため，彼らのうち1人が「友達の店」に行こうという。数人で車に乗り込み，衛星テレビがあり，確実にこの試合を観られる店，つまり店主がチュニジア人の店に移動した。裏返せばテレビや衛星放送という設備は，店に客を引き寄せる重要なオプション（商品）であり，客の方もつきあいだけでなく，当然ながら目的に応じて自分の知る店のインデックスの中から，店を選択している。

カウンターには店主とその妻，女性従業員，数人の客がいるのみで，ちょうど試合がはじまるところだった。彼らは店主にあいさつし，注文をするとカウンター上部にあるテレビが観やすいテーブル席に陣取った。しかししばらくすると，店主の妻はこちらをチラチラみながらチャンネルを変えてしまった。彼らは変えないでくれといったが，妻は聞こえないフリである。結局彼らは最初のビールを飲みほすとすぐに外にでることになった。私にはなぜチャンネルが変えられたのか，外に出ても試合が観れないなら中で飲めばいいのになぜ出たのかわからなかった。彼らは「店主は俺たちの友達でいいやつなんだが，妻はよくない」，「彼女はユダヤ人だからさ」などといったが，彼らにもなぜ他にそう客もいないのにチャンネルが変えられたのかはわからないという。長居されたくないか，騒がれたくないか，旦那の友達嫌いなのだろうという。明確な理由が不明であっても，彼らはこの行為を，サッカーを見ずにビールを飲むという居方を変える方法ではなく，店から出るという方法で受け止めた。それは，店にあなたたちを受け入れないという，もてなしの拒否として受け止めたためである。この出来事は店のサービスとはつきあいを生み出す関係的営みであるだけでなく，顧客（取引相手）を選択し，顔見知りであろうとも交換（関係）を拒否する場合があることを示している。コミュニケーションのためのビールの拒否と，もてなしを拒否するチャンネル変えとは，店主と客の

間に成立する「友達」関係が，内と外の交差点におかれていることを意味している。

彼らは複数のカフェに出入りし，カフェを渡り歩く。それは店との関係，カフェでの過ごし方や話の流れ，個々の用事，その場の顔ぶれ（あるいは誰もいない），雰囲気を変えたいといった状況のなかで，また別の店への流れを生み出した。当初「カフェにいる」といえばカフェ A のことだったが，関係が継続し複数店にまたがりだすと今夜あおうといわれてもどの店にいるのかわからなくなった。そんなとき彼らは店の名前ではなく，区や地名（駅名や通りの名前），店周辺の街路の特徴，店主（そのオリジンやファーストネーム）といった目印で特定化した。たとえばカフェ A はメトロの駅名で名指され，B は「中国人のとこ」，C は 11 区とか「アジズのとこ」と表現された。加えて，店が付帯するオプション（設備や商品），近く車が止められる，駅に近いなどの情報を把握し，それが状況に応じて引き出されていた。

また友人・知人の行きつけの店と時間帯についても把握していた。例えば彼らは特定の誰かに用事がある場合でも，個別に連絡をとって呼び出したり約束するのではなく，当人のいきつけのカフェで待つことがあった。ある日カフェ C にいくと，カルロがきており，「今日は友達に用事があって 10 区にいく。一緒においで」という。インド系やアラブ系の商店で賑わう界隈に位置するそのカフェは，アルジェリア人が経営しており，広い店内は界隈の特徴を反映するように，アラブ系男性客でごった返していた。女性は 1 人もいないが，顧客の年齢層は広く，カルロたちのようなおやじさんたちはカウンター周辺にいるものの，フロアには若い人々の姿がかなりみられる。フロア中央に設置された巨大スクリーンに映し出された衛星放送のサッカー中継と，フロア奥にある薄暗い小部屋で楽しめるビリヤードが若者を集める店の人気の秘訣のようだった。店自体は年季が入っているのだが，巨大スクリーンと衛星放送の存在は，明らかに新たな空間とニーズを引き出し，この店を活気づけていた。カルロはお目当ての相手がよくくる時間帯にあわせて待ったが，姿がなかった。偶然会った別の知り合いも今日は当人を見かけていないという。2 時間ほどしたところで「どうやら今日はこないらしい。出よう」といって今度はカフェ A に移動した。

店にとっては様々な商品，オプション，店側の人間と顧客との個別のかかわりと並んで，顧客や常連客もまた，別の顧客を呼びこむ媒介物となる。ほかにも「この店や店主はよく知らないし，ここには好きな銘柄のビールがないから気に入らない」といいつつ，店をなじみにしている友人がくるのを談笑したり新聞を読みながら待つという形で出入りを繰り返す場合もあった。こうした行動は，どのカフェにいくかという選択が，個々人が好みや自分自身の利便性から発掘するものだけにとどまらないことを意味している。そのため，彼らのカフェ通いは反復的に構成されながらも，次々と新たな店やつきあいが蓄積されることになる。個々人の雑多な行き来に媒介されることで，通う店は系統だった店の連なりとは異なる雑多な行き来をつくりだし，そうした雑多な店の横断か

ら，さまざまな界隈や人々のニーズを引き寄せる仕掛けの変化や情報にも，触れることになるのだ。

2.5. 居抜き

彼らは日常的にカフェに通い，渡り歩き，通過していく。しかしそれは単に，カフェの常連――消費者・客――になることだけを意味するわけではなかった。出会った当時失業中だったハビーブは，友人カルロとともにカフェのオーナーになる道を探っていた。起業は，ハビーブには失業から抜け出し，あるいは退職後の生活の目処をたてるための計画であり，カルロには雇われ料理人から転身するための計画である。彼らはカフェに集いながら物件探しの相談もし，カフェを渡り歩きながら店を物件として分析したり，あらかじめ様々なルートから得た情報をもとに物件の目星をつけ，友人たちと見に行った。それはパリの中心街に位置するクラシカルなカフェ・バー，競馬があり雑多な男性中心の客で賑わう大衆的カフェ，チュニジア料理店が営まれているレストラン，住宅街に囲まれた昼食と近隣住民の需要で成り立つ郊外のレストラン・カフェなど，さまざまな形態とオプションの可能性をもった物件だった。調理場担当予定のカルロは，ランチはフランス料理かイタリア料理かチュニジア料理，どれでもいいしミックスでもいいといっており[24]，商形態は店の構造や調度品，地域の客層，料理や店の特徴的な売りを決める多様な項目のなかから検討されていた。

物件探しの時期，カフェ A には，最近サンドウィッチ屋をはじめたカルロの甥や同じように店を探しているチュニジア人の友人もやってきた。彼らは相互の事業を互いに相談しアドバイスしあう相手であり，連れ立って物件を見学しにいった。目当ての店に入店すると，彼らは普段のようなカウンター席ではなく，テーブル席について全体の様子を観察した。そこで店の雰囲気，客の入り，店の構造，内装等をチェックし，そのまま使えるものと，工夫を要するところを話し合った。通りからその店がどんな設備をもっているかも観察した。これはと思った物件では，実は客ではなく物件をみにきたのだと店員に告げ，交渉の余地を確認した。その場で売る気はないと断られることはあまりなく，その日のうちに店内を案内してもらったり，物件としてのメリット・デメリットを聞ける場合もあった。後日交渉する相手の連絡先を聞くと，彼らはバーや別の店に移動し，いつものように過ごした。

ハビーブたちのカフェ探しは結局，値段交渉や銀行からの貸付交渉の決裂などで，次の年にはストップする。しかしこの行動をみてもわかるように，カフェを含めた飲食店は，俗に「居抜き」と呼ばれる方法を通して経営者を変えていく。しかも，空き物件ではなく，現在経営されている店そのものが取引交渉の対象になっている。そのため彼らのなかでも飲食業に就く人々はオーナーが店を売ってしまうと次の職場を探したり，場合によっては転職をせまられた。店を買い取ろうとする外からの働きかけは，ある意味

では飲食店で働く人々にとって常に職場を失うことと隣り合わせの動きだ。とはいえ，彼らはこうした取引を敵対視してはおらず，売ったら他の仕事をするもよし，もっと大きな店を運営したり複数経営できる元手を得られる。働いていた人は次を探すという。その点で，彼らは常に「別の道」に対しても柔軟だった[25]。

物件探しが頓挫した翌年，カルロはヴァカンスでチュニジアに戻った際に立ち寄ったチュニジアのカフェで，パリでカフェCを経営するアジズと偶然知り合った。2人はその場で意気投合し，帰国後カルロは好意からカフェCを手伝うようになる。パリでのアジズは長年，運転手をしていたが[26]，2年前にたばこ屋兼カフェ・バーをはじめたところだった。この店も居抜きによってオーナーを変えた店である。

しかし，アジズの話からみえてくるのは，店の売買が売買でありながらそれ以前の空間と事業の「引き継ぎ」でもある側面である。そこには店がさまざまなパーツが付帯された集積場である側面がみえてくる。居抜きで店を購入したため，たばこ売店，カウンター，厨房，トイレ，テーブルやソファなどの調度品を含めた内部空間はそのまま使うことになる。また目印となる店の名前を変えない方が前の顧客を引きとめやすいかもしれないと考え，店の名前も同じままにした。たばこ販売はカフェに付帯する合法的な賭け事や遊び同様，売上のほとんどを国に納めるため，儲け自体を期待できない部分だが，たばこを買いに立ち寄った客が，隣のバーやテーブルに移動したり，ゲームをすることで収入の割のいいカフェ・バーでの注文につながる可能性があるため残したという。つまり，オプションはカフェ・バーでの消費を促すものとして配置されており，それらの考え方は，前の経営者（フランス人）が教えてくれたという。言われてみれば店内の客がたばこを買って再び席に戻るだけでなく，ふらりとたばこを買いに入り，それからテーブル席へと流れていく人もいる。

また前の店で長年働いていたフランス人ギャルソンがそのまま働きたい意向だったことから引き続き働くことになった。ベテランギャルソンである彼は，背筋をピンと伸ばしたギャルソンウォークに，素早い身のこなし，親しみがありながらも丁寧な接客と，カウンター付近でのおしゃべりに職人的な美しさを備えている。いわば昼間の店の顔となるギャルソンが残るのは仕事の上でもよい。両者の契約の柔軟性もあり，見方によっては，店はオーナーだけが入れ変わった格好である。つまりこの買い取りは，都市の中にある種の連続的な形式を残しながら，そこに参画する新たなプレイヤーと新たな要素が連なることで，変化していく場なのである。

形式はそのままに，オーナーだけが入れ替わったとしてもその内容の変化は著しい。まず形式の維持という点を確認するために，従業員に目を向けてみよう。アジズは以前からのギャルソンに加え，自分のいとこをチュニジアから呼びよせ，ギャルソンとして雇用した。この2人が朝7時から夜7時まで働く。カフェCでは昼間は食事を提供しており，昼食時には近隣の会社員で賑わう。そのため朝から午後3時までの半日契約で

フランス人の料理人を雇っている。料理人は探す前に向こうから仕事がほしいとやってきたという。従業員はこの3人だけである。オーナー，ギャルソン，料理人，こうした店を回す役割を担う人が揃えば店は前の店と連続的に，「引き継ぎ」営業できる。

もちろん，実際のカフェCがまわっていくにはオーナーと正規雇用の3人以外にも，手伝いや一時的にその場を職場にする人が連なっていた。学校休暇の時期にはアジズの高校生の娘とその友人や，12歳の息子がカウンター内に入り，売店とレジ打ちを担当した。また通常時の手伝いは，ギャルソン2人が帰宅し，飲み物と売店のみの営業となる19時以降の時間帯に，流動的にやってくる人々から構成されていた。例えば売店はチュニジア人女性ファティアが，バーを長女の娘婿や，カルロやウィルなどチュニジア人の「友人」たちが手伝った。彼らにはそれぞれ昼間あるいは本業の仕事がある。手伝いに賃金のような金の支払いはなされず，「親切」や「好意」，「友人」，「家族」であることが強調される。夜9時過ぎには店の清掃をするブラジル人女性アンがきてたばこ売店とバーの両側，特にたばこの灰がたまったバーの床を清掃し，トイレの清掃をした。彼女は店をみかけて仕事を得た1人であり，金で支払いがなされたが，従業員として賃金を支払われるのではなく，独立した契約である[27]。

こうして店はさまざまなかかわりの集合から組織されていた。もちろんこの組織は，顔ぶれという点でも仕事のパートや，その場所を流れていく商品や情報という点でも流動的に構成されている。2年後の調査時には，清掃人アンは別の仕事をみつけてこなくなったため，アジズやウィルが店内の清掃をするようになっていた。カルロは毎夜の手伝いから常連客となり，店が手薄なときだけ気を効かせてバー側に移って手伝う存在となり，代わってウィルの妻で別のカフェで働くフランス人のセシルが，ときどきバーを手伝っていた。また，2階のオフィス部分にファリッドが居候するようになった。彼は祖父がセネガルからチュニジアに移住したという人で，ポルトガル人の妻と子供をチュニジアに残して一時的にフランスにきた出稼ぎ者だった。ファリッドも夜のカウンターを，特製カクテルを披露しながら手伝うようになった。

カフェ内の仕事の実際の担当役割はそのときのメンバーにより代行，分割，統合されながら1つの店をまわす組織として維持されている。アンがいなくなったらアジズが代わりに掃除したり，店主との関係によって，雇用にも，手伝いにもなるものであり，仕事の1つ1つは彼女でなくても，また専属の人を雇わなくても行われる。まずは誰がどの役割を担おうとも一定の分担のなかで店を回していくシステムである。これによりカフェCは流動的な構成メンバーのなかでも同じように運営されていく。

同時にそうでありながらも，誰がどのようにその場に連なるかは個々人に固有の関係や事情から決まり，さらにより広い交通という点では誰がこの役割を果たすかによって，場とそこから生じる流れは大きく変化した。例えばオーナーがアジズになったことで，チュニジアから1人の男性がパリに正規雇用の資格をもち渡仏し，さまざまなきっ

かけを通して彼の「友人たち」がそれぞれの事情から店に連なり，それがまた店の外の，しかしその固有の文脈をもつ特定の場所との間を雑多に媒介した。

もともとカルロとアジズはそれぞれがヴァカンスに帰省し，たまたまチュニジアのカフェで知り合う。カルロは渡仏後ずっと飲食業に携わってきたため，最近カフェの経営者に転身したアジズよりも飲食業を知っているといって，ヴァカンスからパリに戻るとすぐ，毎晩夜７時には店にきてバーの反対側に立つ「無償の手伝い」をする「友人」となった。これにより，カフェ A や B の友人たちも，ときおり店くるようになり，一部はカフェ C のなじみ客になった。

清掃人のアンは娘に続いて渡仏したばかりで当時フランス語をほとんど知らなかったが，前述したカフェの「エチケット」によって場に巻き込まれ（サッカー好きの常連たちにブラジルとの連想からロナウドと呼ばれるなど），徐々に店になじみの顔をつくり，言葉も覚えていった。彼女は「生長の家」の信徒であり，私が日本人と知るや彼女は生長の家の日本語パンフレットを持参し，パリ市内の生長の家アソシエーションに行くようにと毎回促した。

ウィルの妻ゆえ手伝いに加わったセシルは，普段市内の別のカフェで働いている。同じ仕事をしていても一方では給与が生じ，他方は生じないわけだが，彼女は常連客との会話やもてなし術を心得ており，相手の冗談への掛け合いにも積極的に加わり店の雰囲気を明るいものにしていた。そうしたコミュニケーションから，カフェ C の顧客の一部は，彼女が普段働いている店にも顔をだすようになった。

ファリッドもまた多くのおしゃべりで店の場を満たした。カルロを媒介にしてカフェ C の常連にもなったチャンとは２人でカジノにいき，その話とトランプをカウンターに持ち帰った。また彼のチュニジア人の友人たちの集まりにカルロが顔をだしたり，カフェ AB「+C」で前よりよく会うようになったチャンとカルロは，家族ぐるみで映画にいったり，チャンの会社のパーティにカルロを呼ぶなど，別のつきあい方をスタートさせた。

カフェは前の店と連続的なシステムとして都市のなかに空間として残る。しかし同時にこうした個々人の雑多な営みに媒介された結びつき方と，そこから生まれる他の場所との／への個々の交通が，組織として維持されるカフェ C の空間を常に新しい場として生成させるとともに，カフェ C と他の場所――パリとチュニジア，カフェ AB と C，生長の家，セシルの店，カジノやレストラン，映画館，パーティなど固有の文脈をもつ特定の場所――とを「関わりのある交通点」として生成させていった。それは，オーナーがチュニジア人に変わったから「チュニジア人のネットワーク」が持ち込まれたという発想とは似て非なる，非系統的な連関としての営みと交通の集積地であるとともに，そうした連関とともに外へと広がっている。

もちろん，カフェ C では，店を組織する顔ぶれによる変化だけでなく，アジズの経

営判断から店内のオプションも変化した。アジズは入口付近にピンボールマシーンを導入し，設置された数当てゲームも飽きないように種類を定期的に変えていた。ラジオやCDが流れていた店内には，音楽に加えてテレビが2台導入されて，1つはカウンター上，もう1つはテーブル席のフロア側に取り付けられた。これによりテレビをみながらの会話や，やはりサッカー中継見たさにテーブル席に仲間と陣取り長居するようになった若者たちの姿もみえはじめた。衛星テレビという媒介物はその周辺に新しい流れと滞留のあり方を，店にもたらしている。

また，居抜きで維持した年季の入った店の雰囲気は「パリの日常風景」を楽しもうとする日本人観光客の立ち寄りも促した。若い2人組の女性は近くの宿に戻る途中，外から見かけていたこの店に思い切って入ったという。日本語のガイドブックを片手にした彼女たちはカウンター付近で言葉が通じなくても，まさに「気さくにもてなされ」，店の方はぜひ日本でうちの店を宣伝してくれと盛り上がった。その場所に人を引き寄せるもの，その場に連ねられていく人，モノ，情報には，こうした偶然性とそこから広がりうる新たな要素をその空間のうちに取り込み，空間を入れ替えていく可能性という「+α」が常に存在する。この「+α」とは個々人が具体の場を歩くこととともに起こる，個と個，個と場の「関わり方」のみが媒介していくものである。

2.6. 交差する内と外

調査中のある日，テレビドラマをみていたら，「ローカルなカフェ」らしい話がでてきた。筋書きはこうだ。カフェで働き出した若い女性がいた。彼女は，コーヒーを飲み終わっておしゃべりを続ける2人組の女性客に「2時間経ったので次を注文してください」といいにいく。女性客はその言葉に気分を害し，帰ろうと立ち上がるが，支払いの段階になって，「いけない，うっかりお金を降ろすのを忘れてたわ。銀行にいってきていいかしら」と女店員に聞く。彼女はそれを渋り，「1人残るか，何かおいていって」といったため，さらに嫌なムードが漂う。その日の終わり，パトロンから，「きみはいい子だが，きみのやり方はうちの店にはあわない。うちは“家庭的で親しみのあるfamilial”ところが売りなんだ。2時間ごとに1杯とか，お金を取りに行くという人を信用しないというのは困るんだ。いたいだけいていいし，お金は次にきたときにでもっていえないと」といって彼女は1日でクビになってしまうのだ。

このシーンは，「親しみのある店」というのはそれ自体が，店の売り，つまり「場所」的なカフェ経営のこだわりであると同時に，他――回転率をあげ，ツケを受けつけない“合理的”な店――と，差異化を図れる生き残りをかけた商売道具となりうる側面を描くものだっただろう。そこでは関係化と売上が，流動的な流れとともにある滞留や往復により成り立っているという点，カフェでできる関係が個別の関係と商売人・消費者間の間にできる微妙な関係が表されている。しかし，「親しみのある店」の売りとなる親

しさとは，「見せかけ」のものというわけではない。

カフェの「友達」には，個人間の関係ではなくその場に集うことを通して一時的なメンバーシップの確認が行われ，国や民族・人種のステレオタイプや特徴的な要素のカリカチュアを関係化（冗談）のためのインデックスとする点を先にみた。こうした関係化は同時にその場に「顔を出す」というつきあいの実践を支えることにもなる。

たとえばカフェCに1週間ぶりに顔を出すと「やっとおでましだ。1週間もこないなんて冷たいなぁ」といいながら暖かい抱擁で迎えてくれるアジズは，私に居場所を与えてくれることになる。また顔なじみが，「このところこないけど，どうしてるんだ。もう4日，いや1週間近くになるじゃないか！」と電話をくれる場合もある。徐々に私へのよびかけや周囲への紹介の言葉も，単なる日本人ではなく，例えばアジズは私をいとこと呼び，ハビーブは娘，カルロは友達 copine や姪，チャンは妹という言葉を使ってくれるようになった。ハビーブの娘と同じ年だったことや，「日本人でもチュニジア人といとこや姪になれるさ」という。「俺たちは平たい顔も一緒」と笑うチャンが，妹と呼ぶにはアジア人同士であることのメタファーも含まれた。彼ら同士でも，顔なじみやリピート客に親しみを込めて，友達やいとこ，オジといった言葉や個人名で互いを呼び合う姿が見受けられた。

カフェは，そうした親密性がつくられる「親しみのある場」だが，そこでの関係は個人間の関係ではなく，さまざまな人たちが出入りする場それ自体がつくる関係である。そうした彼らにとってはカフェ内部が「パブリック」空間であり続けるために，数人で私的で「入り組んだ」会話をするときには個別にテーブル席に行ったり，テラス席，つまり路上に出る行為も見受けられた。周囲に気を使って会話の内容を選んだり，わざわざ外に出て話すという行動は，カフェ内部の空間が単に匿名的な人々の集まりや関係的な場だといっても，その具体的な場を共有する人々とともにある空間であることに拠っている。そこにあるパブリックとは，ゾーニングによってつくられる用途としての「パブリック」とは，やはり似て非なるものである。

それは「親しみのある場」が，実際の親しみのある関係を生み出してしまうことにも現れる。経営者アジズはときおり客の身の上話を聞いてはカウンターの「向こう側」にいられなくなり，顧客側に座って隣で話を聞き一緒に飲んでしまうことがあった。あとでカルロに「パトロンが一緒に飲んでどうする。店をつぶすぞ」と忠告され，翌日には「もう俺は店では飲まない」と宣言しては，また誰かが相談ごとをもってきて，その態度を崩してしまう。カルロの忠告は商売上の線引きの上に，関係を維持するのがカフェの経営者としての行動であり，その自覚を促すものだ。とはいえ，カルロもまた，アジズの店を手伝おうとカウンターの「向こう側」に立ったとき，彼が相手にするのは自分が常連であるときと同じカウンター空間であっても異なる身体の動きが要求されることになる。横から入る注文に，客の会話の相手，仲良しとの会話に気をとられて，他の客

の声を聞き落とし「彼は，新入りだね」といわれてしまうこともあった。カウンターの向こう側に立ったからには，客からバーテンとしてのしなやかな動きを要求されるのだ。カウンターのこちらと向こうは，その場での身体技法という点でも，セルフとコモンを同じ文脈で過ごさないという点でも異なっている。しかし，前述した通り，あいさつや常連との関係に向けられた「商売人と消費者として向き合っているのではない」という関係作法は，商売上のエチケットでありながら，あくまでもエチケットだという線引きが難しい，関係化を促すコミュニケーションなのである。

そうでありながら，カフェ通いのなかにみられた親しさは，常連と店，常連同士の内に閉じたものになっているわけではない。私がカフェにいないときにも，偶然日本人の子が隣にいるといって電話をかけてくる人もいた。そんなとき，私は知らない人と電話で話しながら，目の前のストレンジャーを場に取り込んだり，一時的ながらも「出会う」ために，今度は私の存在がその場での関係化のための話の種として活用されているカフェの場と，見ず知らずのストレンジャーとの関係化へとつなぎあわされることになった。また，いとこや姪，妹と呼ばれたからといって私が「個人」となるのではなく，日本に店をオープンさせる，一緒に経営しないか，店にたくさん日本人がくるよう宣伝してくれなど，彼らの生活の場が他の多様な状況とつながる媒介的要素を複合的にもつ存在として，活用されもした。それは親しさが常に「内向き」の関係をもつだけでなく，様々な可能性を取り込む多様なニーズの媒介点として「外」へと開かれたものだからである。

このように，カフェは「内」と「外」が交差する場である。そこでの「パブリック」空間は，ゾーニングの発想にみられる私的空間や親密圏から切り離された公共圏としての「パブリック」ではない。それは親密か否かとは異なる，消費ニーズや選択的空間，オプションを伴うことで，さまざまな「外」に，個々人の具体的な関わり方として連結された空間であり，その関わり方の雑多性こそが，外でもあり内でもある場をつくりだすのである。

3　結びに代えて

ストリートとカフェの関わりはしばしば，パリという舞台が強調される際には家でも職場でもない「第3の場所」という中間項に重ねられることで，流動的で匿名的な都市住民たちが雑多な人々と交歓する場というイメージを与えられてきたのに対し，チュニジア系移民という人々が強調される際には，共同体的結束のネットワークというイメージが与えられてきた。本論では，彼らのカフェ通いという習慣的な反復の具体の場が，実は膨大な数にのぼるだろう多様な形態の店の存在と，それに負けるとも劣らない多様な形態の渡り歩きから構成されていること，その消費の多元性や消費から商売への転換

の可能性，別の活動への連鎖が，知的にも活動の性質としても複数性をはらんでいること，そうでありながらそれらが別個の世界としてあるのではない，関係と接触の場であることをみてきた。

本稿で，関係化や生活の場に注目したのは，単に都市において，空間や身体やメディアが浮遊するだけでなく，それらが意味を付与される媒介的な接触点でのコミュニケーションのあり方と技法に注目するためであった。個々のカフェや通いを通した交通（＝コミュニケーションの営み）によって生まれる場は，家や友達 ami と共有する場と区別されながらもつながって，親密な関わりあいを生み出すとともに，別のカフェや都市の場への流れと交通を生み出す。そうした流れは同時に，その内向きの遊び仲間 copin や関係に閉じることなく，その関係を基にして外とつながっていくものでもある。

カフェ通いによって生まれる場は，非―場所の増大と不確実性の時代にいまだに残存する場所的空間なのではなく，流動性を受けとめ，また流動性とともに，そこで暮らすことを可能にする生活の複数性が営まれ，織り成される場である。そうした場が，捉え難くも確かにあると思えるには，膨大な多様性が雑多な連関をみせる営みそのものを，追い続けるしかないのかもしれない。

注

1) 例えばカフェが開かれた公共空間であると同時に，プライベートなアソシエーションやネットワークを知るアリーナであることに着目した研究（Grillo 1985）や，パリ郊外のカフェにモロッコの「村の飛び地」がつくられる様を描いた研究（渋谷 2005）がある。しかし眼を転じると，カフェという場を通して移住先に生活基盤をつくるのはアラブ系ばかりではない。そもそもパリに大衆的なカフェを出現させ，典型的な空間構造や商システムをつくったのは 19 世紀後半から 20 世紀初頭の出稼ぎ者（オーヴェルニュやブルターニュ地方，イタリアなど）たちであり，近年でもカフェ経営者の出身地は多様化している。カフェが移住者たちの「身内世界」では，移住後の宿――情報から文字通り宿としての活用まで――や仕事を得る実際的な空間となる点でも，店主の出身地に関わらず類似した実践がみられる。このことは，特定集団や消費者ネットワークだけでなく，「身内」の創出の仕方とともに都市空間を生活の場として活用する実践として広く考察することが可能だろう。
2) 19 世紀パリのカフェは，家庭やサロン，劇場，教会，証券取引，議会，祭りそして路上といった様々な社会空間と結びつくとともに，それらカフェ以外の社会空間とのアナロジーが見出されてきた。とりわけ労働者たちのカフェは仕事の世界と余暇，パブリックとプライベート，男性と女性，秩序と無秩序，政府の規制とコミュニティライフ，集合と個人，政治的関与と無関心といった様々なものの接合部であり，飲食物の消費を通じてあらゆる関係が媒介されてきた（Scott 1996: 3）。こうした媒介性は「第 3 の場所」として，フランスにおける社会的意味を獲得してきた。
3) カフェやその商い（起業，店舗，商品の開発）とはもともと雑多な世界とストリートの知の結びつきからできあがってきた。玉村が紹介する 19 世紀後半の例でも，時のニーズに目をつけ水や炭運び屋をはじめた人々が，炭のストック空間として構えた店にカウンターをしつ

らえ，雑貨や飲料（地元産ワイン）を出した「炭屋兼酒屋（ビストロ）」から広がった（玉村 1997）。そこに，人気の飲み物だったグローバル商品・コーヒーの提供や，パリになかった地方のフォークカルチャーが，時の新たな嗜好・消費ニーズのなかで商われるなかで多様な形態の店と文化消費，文化形態のかたちが生み出されてきた。その多様な形態の存在は人々の営みが，ある素材を媒介に雑多な人々を集める流動的な中心点をつくりだしてきた痕跡であり，都市や特定民族の習慣にフィックスされたものではない。

4) パリと郊外（banlieue）を含めてパリ地域と表現する。この地域は人々の生活空間としての連続性をもちつつも，異なる場所性と相補的表象を伴って配置されている。今橋によれば，フランス語の「郊外」に当たるバンリューは語源的には「バン＝領主の布告」が及ぶ「リュー＝里（約 4 キロ）」を示すが，そこから転じて「大都市を囲み，その都市に従属する地域」を意味する（今橋 2004: 15）。

5) 一般的には主に都市計画の文脈において，用途や機能の混在を避け，秩序ある土地利用を行うことがゾーニングの目的（和田 2007: 183 を参照）とされている。

6) 商店や宗教施設，各種活動は，例えばアパルトマンの一室にその活動の場があることを考えれば，路上から不可視の場所にもつくられるものだが，それは「閉じた空間」――プライベートなもの――につくられたものであり，誰もが出入り可能な「開かれた空間」――パブリックなもの――とはされていない。

7) 具体例は鳥海（2004）に詳しい。背景には（ネオ）オスマン主義に代表される画一的な都市景観の出現を避けるため，既存の都市組織の多様性にあわせた柔軟な都市プランへのシフトがある。それは，パリを歴史的，組織・構造的，形状的，機能的，視覚的に特徴化し，保全すべき界隈や保全に値する建築物を囲うと同時に，特徴に応じて各敷地・各建物単位で規制を適応し，空間的な次元から景観と機能を保全・再創出する営みである。並行して新開発やリノベーションによる再生事業もいたるところで進められている。これらは都市計画のみならず司法，商業，住民による多様な知と意味同士の交渉や競合・協力のなかでつくられる個別的な実践ではあるが，前提された「既存の都市組織」が交渉のプロセス自体のなかで実体化されたり，交渉自体からも排除される活動・組織・空間の関係があるのも事実である。それは合法性や権利，社会的な倫理や美醜と関わり，今日的な啓蒙の領域におかれている。

8) 無のグローバル化（リッツア）との関わりでいけば，フランス的なものや多様性は「有」の記号ということになるが，これはストリートの景観のなかで異なる文脈をもって成り立つ店舗や住居と横並びになって存在しており，それ独自の文脈の殻におさまるわけではない。路上の景観はむしろ細分化された様々な様相のつぎはぎとして展開し，次々と文脈を変えてしまう。そのことは非―場と場や，無と有といった対比よりも，むしろ雑多性を唯一の特徴として可視化させることになる

9) ブラン＝シャレアールはパリ 20 区の変化として 1970 年末頃から多様な民族（北アフリカ系，アジア系，アフリカ系，トルコ，スリランカ，マレーシアなど）の居住に加え，数多くの店舗の購入やエスニック商品を売る小規模商店，宗教施設の出現とそれら店舗や施設近辺に現れた「群衆」をもって，地域が諸集団（コミュニティ）ごとの「住み分け」傾向にあると指摘している（ブラン＝シャレアール 2006: 214–222）。ここで見いだされた「群れ」と「分離」は，ある空間の媒介性によって集まった人々の身体が路上で観察されるとき，同質的な民族コミュニティの集合記号として読みとかれていることを意味する。多くの場合，こうした「多様な民族」の街並みが可視化している界隈は，いわゆるパリの景観保全の対象地区ではない一般規制地区だが，人々の外見や商店などが示す多国籍風の景観が，地区のアイデンティティとして機能している。それは，実際には異なる要素をもつが目立たないものや連続性の

ないところに「界隈」と「コミュニティ」を可視化させ，時に「文化による分断」というモザイクのイメージを提供している。

10) 戦後成熟していく福祉国家が経済不況を契機に「福祉国家の危機」といわれる状況に入り，膨大な層の「排除された人々」が顕在化しはじめる転換期である。同時期はEC（当時）域外からの移住制限がはじまり，この制限が逆に，男子・単身・短期の出稼ぎ循環型だったマグレブ系移民を，家族の呼び寄せにはじまる長期定住型にしていった時期に重なる。その後徐々に増加するアジア・アフリカ系オリエンタルの存在は，1970年代後半以降さまざまなエスニック・ビジネスの広がりや，エスニックリバイバル現象とともに，フランスに異質性や多様な異文化の存在を可視化させ，とりわけパリをはじめとする都市の景観を大きく変えた。

11) ブルデューは，大衆的カフェは仲間の空間であるため親密だが，プチブル的カフェでは人々は互いのテーブル空間への関与（例えば椅子や塩入れを借りる場合など）に際し許可を求め合うとして，行動様式の違いを説明する。しかしこれは，大衆とブルジョワあるいはプチブルとを根本的に分かつものかどうか疑わしい。「大衆的なカフェ」でまさにブルデューが指摘するような行動様式を実践する人でも，レストランあるいは，カフェで「互いに切り離された独自の領分」を尊重し，介入に許可を求めることはするからである。

12) パリには市内に張り巡らされたメトロのほかパリと近郊を結ぶ首都圏高速鉄道網・RERが走る。そのためRERの駅構内やRER停車駅周辺での移民の外見をした若者の取り調べとは，単に移民や外国人の外見一般へのものというより，「郊外の若者たち」が社会的にカテゴライズされた記号として彼らの身体の上に重ねられるとともに，具体的なコントロールの対象になっていることを意味する。

13) 息子をモスクや語学教室に通わせるある母親は，「教室にもガラの悪い子たちがいる。息子が外でばかなことしないように放課後のお守り代わりに放り込んでくる親がいるらしい」というううわさを聞いてきたし，ある妊婦は「生まれた子が男の子だったとしても，外には出さないわ。うちにいさせる」という。こうした意識をもつ人々は，男は外に出し女は内にいるという「向こうのやり方」を反復せずに，息子も娘と同じように学校から戻ったら外に出るのではなく，「中」に居場所をつくるのがよい環境だろうと考えている。「息子たち」の問題は，空間としての路上＝ストリートを，居場所や溜まり場にしないための社会的力学を促し，路上から「中／施設・室内」への編入が働きかけられている。

14) ただし，男性たち自身は，ときどき，「男友達と一緒に過ごす」世界と語りはしたが，カフェに通うことを移民コミュニティの内側の行為か外側の行為かという比較から区別してはいなかった。第1世代の妻でも，例えばハビーブのカフェ通いの友人カルロの妻は，夫のカフェ通いを「彼，あれだけはチュニジア人のまま」だといい，彼が「外にですぎる」ことに不満をぶつけていた。その不満のなかでのカフェ通いは，「向こうのやり方」の反復であり，入り浸って男同士尽きることのないおしゃべりをする「限度のない友達づきあい」や，家庭（家族や子どもの心配事にタッチしない）を省みない行動とされていた。

15) 正確には今日の新しいカフェにカウンターがないわけではない。それはガラス窓に面し通りに向かって座ったり，壁に向かう場所に1人1人に当てられた椅子とともに位置する。ここでいう「伝統的なカフェ」のカウンター空間とは，バーテンや店の主人と売り台・レジ兼飲み台をはさんで向き合う。多くの場合スタンドなので，何人並べるかの定員は流動的である。シヴェルブシュによれば，19世紀になって居酒屋に登場するカウンターという家具は，販売と飲酒効率のよさという点でも，膨大な人数がカウンターを通過していくという点でも，いわば交通革命であり，居酒屋にあった居心地のよさを喪失させたという（英米で顕著であり，大陸ヨーロッパではそれほど革命的変化を起こさなかったとはいっているが）（シヴェルブ

シュ 1988)。その点ではカウンターという家具にはさまざまな合理化の要素が詰め込まれており，親密さや居心地のよさという周囲の人々との関係の距離感を示す雰囲気には，「セルフ」と「コモン」が表裏一体なのである。

16) 2006 年までの調査の記録である。フランスでは 2008 年 1 月 1 日より，公共の閉じた空間（カフェやレストラン，ディスコなどの屋内）での喫煙が禁止され，違反者と店には罰金が課せられるようになった。

17) 彼らはイスラム教徒であり，飲酒しない人もいる。飲酒する人々も，カフェ自体はチュニジアにいたときから行っていたが，ビールを飲むようになったのはフランスでだという。その場合でも，ラマダン期間中の飲酒は概ね避けられていた。

18) 50 歳代，在仏約 30 年。ハビーブとは年齢が違うがチュニスで近所に住んでいた旧知の仲。渡仏後は一貫して飲食店の厨房職についてきたが，実際の勤務という点では実に多様な店を点々とした。当時恒常的に就いていた職は 7 時から 15 時までの昼食を軸としたものだが，夜にはときおりカフェ A 近くの別の店で助っ人をした。その店の常勤シェフはカフェ A での知人である。店は同年オーナーが売りに出したため，彼らは別の職場を探すことになる。後述するが，飲食店やカフェはしばしば売買され，オーナーが変わったり，店自体が変わる取引交渉の舞台でもあった。

19) 島村菜津は，イタリアのバールはコンビニのようなものや，ジェラート屋，ケーキ屋，たばこ屋，トトカルチョ屋などとドッキングしたもの，寄り合い所バールなど様々に変化するものだと紹介し，「カウンターでエスプレッソを立ち飲みする場合，他の店と変わらない価格でこれを楽しめるカフェはバールの部分集合」だと述べている（島村 2007: 24)。パリのカフェも，その形態は非常に多様な形態で営まれているが，彼女が「ドッキング」や「部分集合」と呼ぶものは，玉村のいう「オプション」という言葉と重なるだろう。それらは掛け合わせにより幾通りもの商品や商売，そして交通を生み出す。

20) この店で働くのは，若いオーナーとその妻，オーナーの兄弟，売店やバー，掃除婦として働く数人の女性すべて中国系アジア人で，バーテンのみヨーロピアンだった。数年単位でみると従業員の顔ぶれはときおり変わっており，フランス語に堪能ではない者もいる。いつもカウンターで世間話をしているカルロは「ここで働くのはオーナーの同郷人。中国からフランスにきて最初は家も仕事もないし言葉もわからない。だからまずここで客の相手をしながらフランス語を覚え，それからもっといい条件のところに移っていく。すると，次の新人がくる」と解説した。「パリが中国人だらけになる仕組みだ」と笑うと，最初はまったくフランス語を知らなかったという女性店員も笑顔でうなづく。昼下がりには従業員の子どもたちが店内で食事をしたり走り回って遊ぶ姿もある。彼らにとってもまたカフェは生活の場である。

21) 店内での良好な関係の破綻は，表（＝路上）に持ち出される格好になる。このときは，周囲が止めに入ったほか，片方が店から出て行った。

22) 彼らの多くは携帯電話をもち，連絡先の交換は比較的容易に行われる。しかし，教えられた番号が親族のものだったり，ヴァカンスでチュニジアに戻った際に携帯をあげてしまったり，時折行う電話帳整理での番号消去等，一度番号を交換したら親しさの表れだとみることはできない。また家庭の固定電話でさえ，数年経てば変わっている場合もあり，その消息は追いにくい。しかし，店への出入りが続いていれば月日が経ち，電話番号を頼れなくても再会することができた。また出入りしなくなった場合でも，個別に連絡をとっている人や店主が消息を知っている場合もあり，その点では電話という装置を介さずつながりを保つこともありうる。

23) 例えばチュニジア人は「アルジェリアでは 1 人の男が 4 人の妻を娶れる（＝遅れている），

モロッコはいまだに王政（＝遅れている），チュニジアは 1 夫 1 婦制が国の法律で決められているリベラルな国だ」といってお国自慢をし，こうした掛け合いの際には相手をばかにするステレオタイプとしても用いた。話す人の出身国が違えばこれらの特徴は別の言い方で語りなおされ，いずれにせよ，お国自慢のストーリーになる。アジア系のチャンが入ると，中国 4 千年の歴史と歴史なきチュニジアの対決や，人間の進化とアッラーによる創造というモチーフが，互いに「お前，本気でそれを信じてんのか」という掛け合いに持ち込まれ，議論になる。

24) 彼のこの柔軟な意見は，料理というものが本来素材や組み合わせ，調理法の境界を越境するものであるのに加え，彼自身の職場経験自体も複数のジャンルを横断してきたことの表れであろう。

25) ここでいう「別の道」とは，別の職の場合やときにフランスとチュニジア以外の場所をも含む別の地域での飲食業の可能性を含む。また，「失業中」や「仕事がない」と表現する状況下でも，単発の流動的な仕事をして収入を得ていた。

26) 1972 年，19 歳で渡仏し，最初は溶接工として工場で働いたが，工場の仕事が減ったため，トラック運転手，バス運転手を経て，タクシー運転手を 22 年やってきたという。カフェのオーナーになったのは 2001 年，「（車で）移動する仕事にはもうあきた。次は一箇所にいる仕事がよかったんだ」という。

27) 他に，店としての支払いは生じないが独立した商いとして，ごく稀にだが花売りがやってきて店内をまわった。花売りや物売りは，カフェのテラス席の人々（＝路上の人々）や店内の客を自分の顧客にする人々だ。店内で花を売るには店主と交渉する必要があるが，店主が販売を断ろうと話しかけるその話に割って入り，彼から花を買う客もいる。この点でも，カフェは交通空間の特徴を有している。

文　献

オジェ，M.
2002 『同時代世界の人類学』森山工訳，藤原書店。

バルト，R.
2004 「記号学と都市の理論」篠田浩一郎訳，今橋映子編『都市と郊外　比較文化論への通路』pp. 41–53，NTT 出版（初出は 1975 年，青土社）。

Battegay, A.
2007 Les recompositions d’une centralité commerçante immigrée: la Place du Pont à Lyon, publié en ligne le 19 avril 2007 (http://remi.revues.org/sommaire164.html).

ブルデュー，P.
1990 『ディスタンクシオン Ⅰ』石井洋二郎訳，藤原書店。

ブラン＝シャレアール，M. C.
2006 「パリの外国人空間，過去と現在――民衆の街区から多様なエスニシティの街区へ」西岡芳彦訳，中野隆生編『都市空間と民衆――日本とフランス』pp. 198–224，山川出版社。

ゴッフマン，E.
1980 『集まりの構造』丸木恵祐・本名信行訳，誠信書房。

Grillo, R. D.
1985 *Ideologies & institutions in urban France: The representation of immigrants*. Cambridge: Cambridge University Press.
Haine, W. S.
1996 *The World of the Paris Café: Sociability among the French Working Class 1789–1914.* Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
リンチ，K.
2007 『都市のイメージ』丹下健三・富田玲子訳，岩波書店（初出は 1968 年，岩波書店）。
リッツァ，G.
2005 『無のグローバル化――拡大する消費社会と「存在」の喪失』山本徹夫・山本光子訳，明石書店。
シヴェルブシュ，W.
1988 『楽園・味覚・理性　嗜好品の歴史』福本義憲訳，法政大学出版会。
Sekine, Y.
2005 Contemporary Popular Remaking of Hindu Traditional Knowledge: Beyond Globalisation and the Invention of Package Knowledge. In C. Daniels (ed.) *Remaking Traditional Knowledge: Knowledge as a Resource*, pp. 163–193. Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.
渋谷　努
2005 『国境を越える名誉と家族――フランス在住モロッコ移民をめぐる「多元場」民族誌』東北大学出版会。
島村菜津
2007 『バール，コーヒー，イタリア人――グローバル化もなんのその』光文社新書。
Simon, G.
1990 Immigrant Entrepreneurs in France: A European Overview. *Institute for Social Science Reserch. Volume V. 1989–1990 California Immigrants in World Perspective: The Conference Paper, April 1990* (University of California, Los Angeles). http://repositories.cdlib.org/issr/volume5/9/
玉置豊男
1983 『パリ　旅の雑学ノート』新潮社（初出は 1977 年，ダイヤモンド社）。
1997 『パリのカフェをつくった人々』中公文庫。
鳥海基樹
2002 『オーダー・メイドの都市づくり』学芸出版社。
和田幸信
2007 『フランスの景観を読む』鹿島出版会。

写真１「若者たちのメゾン」でできあがった作品

写真２　向かって左側がブラッスリー，右側がカフェ。入口は別。カフェエリア側には路上に席が置かれている。店舗正面だけでなく右側の通りからもガラスで中が見えるため，入店しなくても誰がいるかのぞける

写真３　カウンターエリア。カウンター付近のライトは少し暗め

写真４　左上赤い TABAC の看板はたばこの売店を，店の窓に緑に光る PMU の文字は場外馬券売場を，青と赤は数字を選んで賭けるくじ LOTO の売店を兼ねていることを示す。他に店内で扱っているビールの銘柄のマークなどがかかれており，こうしたさまざまなオプション記号は店で扱う商品の表示であると同時に店の売りを記すものだ

写真5　大通りサイドからの写真。舗道に面した部分がガラスに囲まれ，パリのカフェに共通するスタイル。ランチタイムにはガラスと，店内テーブル席の壁側に大きく入ったミラーに本日のランチメニューが書かれ，ランチが過ぎると消される

写真6　売店。たばこのほか，携帯チャージ，ガム，飴，ライターなどが販売されている。最後に訪れた2006年3月の調査時には，たばこ1箱が日本円にして約700〜800円前後だった

写真７　カウンターには男性客が多い。ライトの奥，上部にあるのが数あてゲーム。別の年にいくとゲームの種類が変わり，カウンター後部入口付近にピンボール台が入れられており，にぎわいをみせていた。またカウンター席の正面とテーブル席にテレビが設置され，サッカー中継などを目当てに長居する若者グループなどの姿も見られるようになった